

《日本色彩学会関西支部主催 実践色彩講座 2022》

大学の研究室から学ぶ色彩学の基礎と実践

～色のデザインを支えるもの～（第2報）

関西支部長／実行委員長 石田 泰一郎

昨年度実施しました実践色彩講座 2021 は、色彩学の基礎から実践につながる内容を、大学の研究室単位で講義を担当いただき、オンラインで開催するという新しい試みでした。受講者は、研究者や学生だけでなく、色彩デザインやコーディネーター、教育現場で講師をされている方など幅広く、お蔭様で50名を超えました。

今年度の実践色彩講座 2022 では、前回の実績を精査し、継続と新規性にも配慮して、研究や色彩計画などのプロセスがどのような考え方と方法で進められるのかという生の話も交え、多様な受講者に納得いただける基礎と実践を、それぞれ特色のある内容で提供するものです。

今回も、各講座ではそれぞれ充実した講義テキストの提供があります。また、各講座の第3講義に関しては、より実践につながる内容となります。受講者のみなさんとオンラインで対話できる〈質疑応答〉の時間も設けます。前回同様、受講者の便宜を考慮し、講座の翌日以降にビデオ・オンデマンドにて講座の動画を視聴いただける準備もしています。さらに前回の受講者には受講料軽減の特典も設けました。

みなさんの積極的なご受講をお待ちしています。

期 日：2022年3月11日（金）、13日（日）、25日（金）、27日（日）〈全4回〉

時 間：午前／第1限講義（90分、10時30分-12時） 昼食・休憩（60分、12時-13時）

午後／第2限講義（90分、13時-14時30分）

第3限講義（60～90分、14時45分-15時45分 または 16時15分）

会 場：遠隔会議システム（zoom）によるオンライン開催

定 員：80名

受講料：全4講座受講を原則とします。いずれも消費税を含みます。

会員：22,000円 学生：11,000円 非会員：33,000円

前回受講者：会員：16,500円 学生：8,250円 非会員：24,750円

*受講料は、電子請求書を e-mail の添付でお送りしますので、関西支部の口座にお振り込みください。口座情報は請求書に記載します。今回も入金をもって受講申込の受理とします。なお、企業や団体で、お支払い時期に都合がある場合はそのむねお知らせください。

申 込：件名を「実践色彩講座 2022 受講」とし、氏名、会員種別、連絡先（e-mail、郵便番号、住所、電話）を明記し、e-mail にてお申し込みください。また、実践色彩講座 2021 受講者で軽減受講料対象の方はそのむね記入しておいてください。

締 切：定員をもって締め切りますので、できるだけ早くお申し込みください。

申込先：日本色彩学会関西支部講座受付辻埜まで

e-mail:tsujino@gold.ocn.ne.jp または editor@color-science.jp

実践色彩講座 2022 プログラム

「大学の研究室から学ぶ色彩学の基礎と実践 ～色のデザインを支えるもの～」

■ 3月11日（金） 講座1：生活環境の色彩認知 『色を感じる，探る』

<講義 1-1> 10:30-12:00 石田泰一郎（京都大学大学院工学研究科建築学専攻）

『色配列の視覚印象と色の認知』

複数の色を並べた配色は人に様々な視覚的印象を与える。配色は色彩デザインの要点といってよい。しかし、配色を構成する色のどのような特徴が視覚的印象を導いているのか、必ずしも明らかではない。本講義では色光特徴付け法という方法で作り出した配色の調和感や視覚的印象に関する研究の話を中心として、配色を見たときに人が色彩の何を認知して、配色の印象が生み出されるのか考えます。

<講義 1-2> 13:00-14:30 岡嶋克典（横浜国立大学大学院環境情報研究院）

『VR/AR とクロスモーダル効果の基礎と応用』

日常生活では2種類以上の感覚刺激（例：視覚と聴覚）が同時に提示されることが多いが、その際に脳内では感覚統合（マルチモーダル効果）や感覚間相互作用（クロスモーダル効果）が生じている。人工的に五感を制御して「現実」を模擬／拡張可能なVR(Virtual Reality)/AR(Augmented Reality)は、多感覚研究を実施する上で強力な実験ツールとなる。本講義では、VR/AR とクロスモーダル効果の基礎について概説するとともに、色彩学も関連する両者の応用事例について紹介します。

<講義 1-3> 14:45-15:45 浅野 晃（関西大学総合情報学部）

『卒業研究を育てる・卒業研究で育てる』

本学部は理工系学部とは違い、卒業後に研究の道に進む学生は少なく、研究室（ゼミ室）には学生の机もありません。そういう環境での卒業研究を通じた、色彩研究の進め方について、講演者の経験をお話しします。当ゼミでは、教員の研究テーマを学生に割り当てるのではなく、学生自身の興味を、教員の助言・指導で「研究」といえるものに導いています。こうして、卒業研究のいくつかを対外的に発表できるものに育てるとともに、学生が研究を経験することで成長することを目指しています。

■ 3月13日（日） 講座2：色彩の環境デザイン 『色を動かす，整える』

<講義 2-1> 10:30-12:00 山本早里（筑波大学芸術系）

『建築・デザインにおける色彩計画の実施と研究』

筑波大学の研究室で行っている様々な色彩計画の事例を挙げる。大学キャンパス内の学生宿舎や福利厚生棟や、県立高校の建物内外の色彩計画とその効果に触れ、また、時間が許せば自治体のBRT（バス高速輸送システム）のデザイン事例や、自治体の公共サイン、首都圏拠点駅のサイン色彩研究の他、研究調査を行った事例も紹介します。

<講義 2-2> 13:00-14:30 榎 究（実践女子大学生生活環境学科）

『環境デザインと色彩学』

デザインとその印象、特に好み（Preference）のような総合的な印象との関連を取り扱う研究を実施してきた。

「色彩調和論は可能か?」、「色だけ取りだした考察に意味はあるか?」といった視点から研究を紹介し、身近な環境であるプロダクト、インテリア、街並みなどのデザインに対するヒントを提供します。

<講義 2-3> 14:45-15:45 長町志穂（ライティングデザイナー，株式会社LEM 空間工房）

（内容等検討中）

■ 3月25日（金） 講座3：色彩のアナログとデジタル 『色を見る，知る，操る』

<講義 3-1> 10:30-12:00 酒井英樹（大阪市立大学大学院生活科学研究科）

『アナログカラーの基礎と実際』

色覚やデザインの評価を行う際，最近では，液晶モニタを使って色を提示することも多くなってきたが，昔ながらの色票（アナログカラー）を使う必要も無くなったわけではない。本講義では，実際の色票を使う際に気をつけるべき点や，実空間で色彩を確認する際に起こる問題（視感測色と機器測色，実空間と VR 空間の比較，皮膚の色と静脈錯視）など，アカログカラーの基礎と実際を学びます。

<講義 3-2> 13:00-14:30 土居元紀（大阪電気通信大学情報通信工学部通信工学科）

『デジタルカラーの基礎と展望』

コンピュータで取り扱われるデジタルデータとしての色彩（デジタルカラー）について，その入力から処理，そして出力に至るまでの概要について学びます。特に画像処理の分野での色彩の処理について，デモを交えて講義します。また，講義 3-1 との共通トピックとして，分光画像に基づく皮膚の色のシミュレーションや，ディープラーニングを用いた色素斑のシミュレーションについて紹介します。最後に，ディープラーニングと色彩の話題について触れ，今後の展望を述べたいと思います。

<講義 3-3> 14:45-15:45 高畑雅一（画家，芸術家，学術博士）

『アートカラーの理論と実践』（仮）

第3講では，画家の高畑雅一氏を迎え，絵画における色の役割や，デザインにおける色の選び方・作り方，色覚と芸術の関係などについてお話しいただく予定です。

■3月27日（日） 講座4：質感の科学と応用 『色を超える』

<講義 4-1> 10:30-12:00 溝上陽子（千葉大学大学院工学研究院イメージング科学コース）

『私たちの眼は質感をどのように知覚するのか？』

私たちは，見るだけで物の質感を捉えることができる。どのような情報が手がかりにして質感を知覚しているのでしょうか？ 質感という概念は幅広く，包括的な理解への道のりは遠いように思われるが，その知覚メカニズムに関する研究は大きく進んでいる。本講義では，これまでに分かってきた質感の知覚メカニズムの基礎について解説し，照明と質感認識の関係なども含め質感知覚に関する最新の研究動向も紹介します。

<講義 4-2> 13:00-14:30 菊地久美子（株式会社資生堂 みらい開発研究所）

『肌の質感，化粧品の科学と開発』

肌のつや感や透明感，くすみ感といった“肌質感”を理解することは，皮膚科学・化粧品学・コンピュータグラフィックス・デザインなど様々な分野において重要である。肌の質感は，肌から反射された光に対する知覚反応によるものであり，“肌質感”の理解のためには，その光学的な特性を計測し，再現を行い，視覚への影響を明確化することが必要となる。本講では化粧品開発の視点から，質感の計測とその再現について，最近の研究をまとめ伝える予定です。

<講義 4-3> 14:45-16:15 青木正明（染色家，京都光華女子大学短期大学部ライフデザイン学科）

『天然染料とはなにか？ 失われた上代の染色技術探索作業を一例に』

1856年にイギリスで合成染料が作られる以前は，洋の東西を問わず当たり前の染材料として天然染料が繊維の染色に使われていた。高い耐久性及び豊富な色彩パリエーションに比してローコストが可能になった合成染料の台頭により市場からはほぼ姿を消した天然染料について，その概要と色彩評価との関連を，すでに高品質の染色技術を確立していた平安時代の我が国の天然染料による染色技法の探索のための研究視点から解説します。

<tezomeya 工房>内からの中継で，実際に染めている作業場をご覧いただきながら ・天然染料でなぜ染まるのか？ ・天然染料の特徴（合成染料と比較して） ・日本の染色技術，特に非常に高品質な遺物をたくさん残している平安時代の染色手法に関わる唯一の文献，延喜式の材料リストを紹介しつつ当時の染め方についての話 ・その染め方を探索するために色彩評価が非常に有効であることの話 を，できるだけ客観的にお話します。